

---

# 心の音

日向葵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

心の音

### 【著者名】

Z6567E

### 【作者名】

日向葵

### 【あらすじ】

野地のなにげない言葉にて、晶子の心が「おと」をたてる。「失恋」の続きものです。

「なんか」のお菓子おもしろくなー?」

「え?」

帰り支度をしていたら、突然野持さんに話しかけられた。驚いて振り向くと、先ほどサークルのメンバーからもらつたお土産をにゅっと突き出す。

「それなら、わざ私ももらいましたよ。」

なんて」とはない、よくあるりんごケーキなんだけれど、何が気になつてゐるのか、野持さんは面白にその個装された一口サイズのお菓子をぐるぐると手の中で弄び、それから私を見てにゅっと笑つた。

「メモリアル・ピュア・ケーキつていつんだって。」

「」にネーミングだよね、と「」に手を添え、野持さんがうんうんと一人頷く姿に思わず笑つてしまつた。

メモリアル・ピュア・ケーキ…確かにそれはす」にネーミングかもしれない。

「思い出が詰つたケーキなんですかね。」

面白にからつて調子を合わせて受け答えると、野持さんは腕を組み、

難しい顔をしながら言った。

「食べる」と、いろんなことを思い出すケーキなのかも。人によって味が違うんだよ、きっと。

甘ずっぱかったり、ほろ苦かったり……。」

「ほろ苦いのはちょっと嫌だな。」

「だね。」

顔を見合せたままちよつと間があいて、そして次の瞬間、二人でふき出した。

「汗と涙の味もあるかもしませんよ?」

「それってしょっぱいの?」

「うわ~もう食べれない!!」

こうなつたらとまらない。

お腹を抱えて大笑いをしていたら、さすがにもう片付けてとサークル長の佐野さんに怒られてしまった。

「も~、野持さんが笑わせるから怒られちやつたじゃないですか。」

佐野さんにもたされた備品をよつこらせと持ち上げ、まだ涙目な横目で野地さんを軽く睨むと、悪い悪いと口先で軽く謝るだけで全然悪びれもない表情のまま、私の荷物に、どれ、と手をかけた。

持つてくれるの?という淡い期待をすぐさま打ち破り、その手に体重をかけたからさあ大変、荷物の重さが倍増し思わずよろけてしまった。

「野地さん……」

「ああ、『めん。もつと重くしたひじつなるかなつて思つて。』

しれつと言ひ野持さんは満面の笑みで、不覚にもむきあつとしてしまつた私は

くやしくて彼のひざを軽くけりつけた。

側でやりとりを見ていた佐野さんが野持さん曰く「おこおこ、いじめは駄目だぞ」

と笑いながら諫めたが、野持さんはけりつとして言つた。

「愛情表現ですか。」

その言葉を聽いて、心の中で「ひとつ何かが音をたてた。」わかつてゐる。

彼にそんなつもつはないつてことも、大事な彼女がいるつてことも

それでも嬉しくなつてしまつ自分がそこに屈つて  
どうしようもなくなる。

もつやめよう。

何度もそう思つてははずなのに

あんな風に一人で笑いあつたり、話したりすると  
心がどうしようもなく音をたてて動くんだ。

重症だなあ

そつと嘆いて、

わつあもりたお土産のケーキを口ひろおつむじ、  
ほり苦い味が口いっぱいに広がった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6567e/>

---

心の音

2010年11月20日02時58分発行